



2度目のベトナム視察は昨年の倍近い16名で6月8日から5泊6日、ハノイへと飛び立ちました。

昨年は役所、会議所、大使館等への公式訪問と現場視察に追われて観光する暇がありませんでした。国と国との交流にはその国の伝統、歴史、文化に接し、理解することだと教えられております。

ベトナムの人口は凡そ8千万人を数える多民族国家であります。主な民族はキン族、凡そ5千6百万人を除くとほとんどが10万人台の少数民族

が建国伝説のように上手に住み分けて暮らしております。

戦後は民間経済の自由化（ドイモイ）に政策転換して、農業も経済も発展を遂げてまいりました。

これらの発展には日本からの進出、援助に大きな期待が寄せられていることは間違いない事実であります。

私が10年余り前に見たベトナムとは違って、今のベトナムは、私達中小企業でも直接取り組めるのではとの安心感、現地での成功事例を見てわかったことはまず、現地によきパートナーを見つけ持つことであります。今回私が輸入できそうなものは、なす・きゅうり・しょうが・蛤・エビ等であります。しょうが、蛤は今の日本では全く不足しています。

ホテル千成の坂井社長は、女性向き「糯米焼酎」に目をつけて早速輸入されてすでに宴席へと使われています。

小櫃の森山さんのたっでの希望で、塩生産工場の見学を一緒にしました。ミネラルが多い天然の塩を日本へと持ち帰りたいとの希望でした。味、用途も多彩でした。ベトナムは「かかあ天下」ときいておりましたが、この塩工場でも重労働はほとんど女性で男性たちは補助的に見えました。

ベトナムでは「王の法があっても内主（カミサン）には勝てない」との諺がありますが、戦争で多くの男性を失った村を支え、守って来たのもこの女性たちだからであります。

ベトナム戦争の激戦地ダナンは、今では全く姿を変えて静かな高級リゾート地になっておりました。家族ともう一度ゆっくりと訪れてみたい思いが残りました。

南隣のホイアンの港に日本人町が残っていました。かつて八幡船、朱印船そして山田長政の昔話に栄えた日本人は・・・徳川初期の鎖国令が出されるとまもなく消滅してしまったと伝えられた日本人町・・・それは日本人の商法は、その地に草も生えないような根こそぎ奪い取るような商売が嫌われて、母国との往来がなくなると共に存在感を失ってしまって、消滅したと聞いていました。安土桃山時代を思わせる、屋根つきの日本橋を中心としたホイアンの日本人橋は、今でも黒々と堅牢な姿を残していました。

築地に出店する大型店がこの地の草木を根こそぎ奪い去らぬように祈る思いです。

ハロン港クルーズはまさに「海の桂林」でありました。南海の夕日に映える景勝島林は、百聞一見にしかずの世界遺産でありました。

5泊6日、自分の弱音を話せるよき友人がたくさんできたことを喜べる旅となりました。